

Frederick W. Norris:
*Faith Gives Fullness to Reasoning: The Five
 Theological Orations of Gregory Nazianzen,*
 Introduction and Commentary by F.W. Norris;
 Translation by Lionel Wickham and Frederick Williams,
 SUPPLEMENTS TO VIGILIAE CHRISTIANAE
 (Formerly Philosophia Patrum) Vol. 13,
 E.J. Brill, Leiden 1991 xii+314pp.

荻野弘之

本書は1981年以来約10年に及ぶ三者の共同作業にもとづいて昨年刊行された、ナジアンゾスのグレゴリオス『神学講話』についての包括的研究書で、全体の序論 (p. 1-82)・各章ごとの註解 (p. 85-213)・訳文 (p. 217-299) の三部から構成されている。序論はさらに、生涯、著作、Christian Paideia (哲学・弁論術・神学)、Christian Doctrine (三位一体論、キリスト論、救済論)、論敵の実態 (Neo-Arians, Pneumatomachians など)、写本伝承の問題、の各節に分かれ、いずれも最近の研究文献を渉猟した詳細な論述ながら、あるいはまたそれゆえに、全体の論調は中正で堅実である。

生涯と著作に関しては、脚註に列挙された傍証文献の博識充実に別にすれば、特に目立った新しい論点はない。続く節では、グレゴリオスの著作の中で哲学、神学、弁論術が相互に浸透している事情が歴史と構造の両面から描かれる。たしかに『講話』の中では子や聖霊の神性をめぐる論争に際し、両陣営ともに同名異義性、実体と付帯性の区別などアリストテレス論理学の諸概念を駆使し、しかもグレゴリオスが論敵の武器を逆用して鮮やかに論駁する場面が散見される。それでは四世紀の東方キリスト教世界においてアリストテレスの著作はどのように伝えられ、読まれていたのだろうか。この主題は教義の発展の見地からだけでなく、広く哲学史的にも興味深い内容を含んでいる (p. 20-31)。また哲学・論理学の素養が神学の探究にとってどのような効用と限界をもつのか (christian paideia の意味づけ) が、教義上の立場と表裏をなしつつ、正統と異端を分かちもう一つの問題であった経緯を明らかにし、さらにそこから、グレゴリオスを単に雄弁の説教家とみなして (アタナシオスやバシレイオスと

比較して)その神学的独創性を過小評価する見解に異を唱える (rhetorical theology, p. 39).

一方、教義に関しては『講話』本文に即して三位一体論, キリスト論, 救済論の要点をまとめるという, いわば内在的な叙述の体裁をとっている. このことは, 神学的部分の叙述が精彩を欠くからではなく, 本書の歴史的・文献学的性格によるものといえよう.

これに対して, 本書の最大の特徴は, 当時の論敵の立場をできる限り忠実に再構成しながら, 異端との論争の文脈を正確に評定しようと試みる点にあるだろう (p.80). つまり『講話』の中で批判される対象として短く言及される主張が, たとえば実際にエウノミオス派の立場だったのか, しかもそれは明文化された形をとっていたのか,あるいはまた論敵の主張をグレゴリオスの立場から解釈したにすぎないのか, そしてそれが果たして歪曲ではなく正当な解釈であったのか, が検討されるのである.

一体何が, どの点で争われていたのか, それを改めて仔細に吟味するのは, 特に『講話』29-31のもつ弁証論的叙述に由来する. そして五つの講話全体の成立の経緯やその統一性 (極端には真筆性) にも関わる問題だからである. この点で各章ごとの註解と序論 (p. 53-71) はそれぞれ微視的/巨視的な複眼のレンズの役を果たして問題を立体視させる. もっともこの試みが成功しているかどうか, 直ちには断定しにくい, そのためにも R. P. Vaggione ed., *Eunomius: The Extant Works* (Oxford Early Christian Texts 1987) などのある程度まとまったエウノミオス資料が同時に参照されるべきであろう.

これと関連して近年の写本研究の動向にも注意が払われているが, その中では特に『講話』28 (第二講話) の位置をめぐる, これを公刊の際に挿入されたものであり, 従って他の四講話とは成立時期が違ふと想定する最近の提案 (Sinko, Bernardi) を批判し, 成立年代については断定を避けて穏健な立場を維持している (p. 78-80).

さて次に, 本書に収められた新訳 (27を Williams, 28-31を Wickhamが担当) の特徴は, 第一にグレゴリオスが論敵の見解を述べている部分, および論敵が自説の論拠と考えて挙げている聖句を改行, もしくは斜字体で表記し, また微妙な前置詞の使い分けや冠詞, 語句の対比など, 鍵語を太字体で表記している点である. 小さな工夫ではあるが, 弁証論の形をとる文脈ではしばしば, 一つの文章が一体どちらの側の主張なのか, 平叙文か疑問文か, をよく見極めなければならず, その点, 論述の推移と

構成が一目瞭然でまことに読みやすい。

『講話』の原文は名説教家グレゴリオスにふさわしく、極めて簡潔で無駄のない文章であり（華麗な饒舌を披露する場面もあるが）、文意を正確に把握するために、場合によっては相当な補足が必要である。そのため従来の近代語訳と比較して、意味をはっきりさせるためにかなり訳し込んでいる箇所が多いが、この方針は評者としても基本的には賛同したい。ただし “the *literary quality* of this translation exceeds that of other two” (p.81) と断言できるかどうかは分からない。試しに彼が引き合いに出している従来の英訳 (Browne and Swallow, 1894 これはなぜか数箇所訳文が脱落している) と対照してみよう (29.15.5-7)。(斜字体の強調は評者)

For it is not the case that all the predicates affirmed of *some particular being* can be affirmed without further qualification of *his basic substance*. No, plainly they are affirmed of some particular thing, in some particular respect. (p.254)

For it does not absolutely follow that all that is predicated of a class can also be predicated of all the individuals composing it; for the different particulars may belong to different individuals. (Browne-Swallow p. 306)

οὐ γὰρ ἀπλῶς ὅσα κατὰ τίνος λέγεται, ταῦτα καὶ κατὰ τοῦ ὑποκειμένου τούτου ῥηθήσεται • ἀλλὰ δῆλον κατὰ τίνος καὶ τίνα.

Car tout ce qui est dit d'un être ne sera pas dit sans restriction de son principe. mais on voit à qui cela se rapporte et ce qui est dit. (S.C. p.209)

Norris によれば、従来の註解書はいずれも各講話あるいは論敵との直接の論争の中で、議論の流れをきちんと追うことに注意が向けられていなかったという (p.80)。もちろん Mason (Cambridge Patristic Texts, 1899) には本文読解のための文法上の疑問点に及ぶ貴重な示唆が与えられており、本書とはいささか目的や性格を異にする。また独語圏では Bibliothek der Kirchenväter に収録の予定が実現に至らなかったも

の、Barbel (1963)には哲学的、宗教思想史的な伝統に関する重要な註が多く、Moreschini (1986)にも簡潔ながら最新の見解が含まれているなど、それぞれ特色ある文献として軽視できないことは今さら改めて指摘するまでもない。

また本書も底本として採用している最新の批判校訂版である Paul Gallay (*Sources Chrétiennes* 250, 1978)は、綿密な校訂本文と見開きの堅実な翻訳、簡潔かつ適切な脚註を誇るが、どうしたわけか聖書の出典引用箇所の記事に関しては、多数の誤植を含めて、甚だしい混乱を呈している。本書はその点を意識して、各章ごとの註に出典箇所に関するS.C.の訂正を提案しているが、この指摘は概ね妥当であると思われる。グレゴリオスが実際には聖書のどこの箇所を念頭において話しているのか、間接引用の場合、それを一義的に確定できない場合も多い。その点S.C.は広範な可能性を探って出典箇所を提示したが、深読みのあまり過剰な詮索に過ぎて不適切な面があるのも否めない。この傾向も本書で適切に補正されたと評者は考えている。

以上概略紹介したように、本書は従来の翻訳や註解書、また近年の個別研究の成果を集大成した点で『神学講話』の読者にとって画期的な文献であるのみならず、広く四世紀後半のギリシア教父解釈にとっても、この時代の思想状況に関する正確な歴史的知見を提供してくれるという意味で重要な研究書である。Gallayによる批判校訂本の出現と本書の刊行とにより、カッパドキアの高峰『神学講話』へ至る正面の登攀路が開かれたことは間違いない。評者は『講話』の邦訳(『中世思想原典集成』平凡社刊行予定)に際して、その作業途中で幸運にも本書を入手し参看する機会を得たが、実際これなくしては拙訳程度の水準に到達することすら覚束なかっただろうと思う。だが本書に示された膨大な文献学的考証をさらに超えて、三位一体をめぐるギリシア教父の思索が果たしていかなる哲学的実りをもたらしてくれるのか、われわれの探究はようやく緒についたばかりだと言わざるをえない。

なお本書の書名でもある *Faith Gives Fullness to Reasoning* の句は第三講話の末尾 *Faith, in fact, is what gives fullness to our reasoning* (*ἡ γὰρ πίστις τοῦ καθ' ἡμᾶς λόγου πλήρωσις* 29.21.13-14) に由来する。
